

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2009～2012

課題番号：21330132

研究課題名（和文） ソーシャルワークの7次元統合体に基づく多面的多角的実践分析モデルの開発

研究課題名（英文） Development of Polyhedral -Diversified Analytical Model based on the 7dimensional integrated body of Social Work Practice

研究代表者

平塚 良子 (HIRATSUKA RYOKO)

大分大学・大学院福祉社会科学研究科・教授

研究者番号：40257556

研究成果の概要（和文）：

本研究では、多様な領域で実践するソーシャルワーカーの事例を活用して多面的・多角的実践分析モデル（PDAモデル）の開発を行った。モデルの体系的な構造は、実践行為の7次元統合体を基本に実践内容群とクリティカル思考の援用を試みた実践評価群とからなる。部分的に検討課題が残ったが、既存収集事例及びソーシャルワーカーによる実験的適用では実用の可能性が高いと確認できた。加えて方法優位の発想から実践行為全体の把握への転換が明示できた。

研究成果の概要（英文）：

In this research, we developed Polyhedral-Diversified Analytical Model of Social Work Practice (PDA Model), using cases by social workers who works for various areas. The systematic structure of PDA Model consists of contents group and evaluation group of practice which based on the 7 dimensional integrated body of social work practice. Through application of this model to cases, good possibilities of practical use were found although there were some tasks. Also, we could show a drastic change in our way of grasp of the whole acts in social work practice from method of social work having an advantage over other elements of social work

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 21 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
平成 22 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
平成 23 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
平成 24 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	4,700,000	1,410,000	6,110,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：7次元統合体、多面的多角的実践分析モデル（PDA Model）、同時並列的事象、演繹と帰納、質的研究と量的研究、KJ法、テキストマイニング、クリティカル思考

1. 研究開始当初の背景

本研究は、ソーシャルワークが課題解決や何らかの援助を展開するという、いわば、や Doing 志向の強いモデルやアプロ

ーチに席卷され、ソーシャルワークの理論といっても、偏りがあることを問題視してきたことに端を発している。それゆえ、今日、実践科学としてのソーシャル

ワークにおいては、独自の論理とエビデンスに基づく理論化が必ずしも進展していない。多くの実践が蓄積されているにもかかわらず、諸科学の知識を借りた理論武装が依然として続いている現状にある。

こうした状況を鑑み、価値論、認識論、技能論の相互一体的な理論形成を基礎づける研究が不可欠であるとの認識に至った。そこで、研究代表として取り組んだ2005-2007年度「ソーシャルワーク実践事例の多角的分析による固有性の可視化と存在価値の実証研究（基盤研究C:17530420）」等の諸成果を活用し、理論形成のためのより発展した研究を遂行することが重要であると考えた。

すなわち、本研究では、ソーシャルワークらしさであるソーシャルワークの実践行為とは何であるかを明確にし、ソーシャルワーカーが実践した行為を分析、解釈することで独自の理論化に至るべきであるという課題意識の明確化に至った。

とりわけ、ソーシャルワーカーの行為を演繹的に導出した概念的モデル（7次元統合体）と、福祉現場の実践事例、そこで語られる言語の蓄積データとを交差させて帰納法的に分析・検討することで、ソーシャルワークの実践行為が何であるか、導き出すことが可能と考えた。それは実践分析モデルと言い換えることができ、その開発が、ソーシャルワークの実践科学としての基礎になりうるとの仮説に至った。

2. 研究の目的

前述の背景のもと、本研究は、多様な領域で実践するソーシャルワーカーの事例を活用して多面的・多角的な実践分析モデル(PDAモデル)の開発を目的とする。

それは特定の知識に導かれて構成された実践モデルではなく、実践をどのように認識するかを明示する「実践分析モデル」である。言い換えれば、どのような知識を活用したとしても、実践の行為がソーシャルワークでありうるのか否かを示すモデルである。

3. 研究の方法

- (1) 理論研究として、仮説概念の中核である7次元統合体の確認作業とともに、実践分析モデルの体系的な構造について研究する。
- (2) 仮の実践分析モデルを策定する。これを以前の科研で収集した事例を活用して仮

実践分析モデル（仮モデル案）を検討する。

- (3) その際、実践分析モデルの中項目、小項目の鍵となる概念用語の精査をする。（その際、既存の収集事例のなかでソーシャルワークとして成立したと判断した事例を活用する。用語精査の方法にKJ法活用。
- (4) (2)、(3)により作成された仮モデル案に関して、既存収集事例を提供したソーシャルワーカーを対象に意見聴取をする。
- (5) 仮の実践分析モデル案の検討を繰り返し、プレ最終モデル案を確定する。
- (6) (5)を用いて、ソーシャルワーカー数名から自験例にプレ最終モデル案を適用し、詳細に検討する。
- (7) 必要に応じて実践事例を収集して最終モデル案を構成する中項目、小項目の精査を行う。
- (8) 優れた実践事例やソーシャルワークとして重要な実践事例を対象に中項目、小項目に属す用語をSPSSソフトのテキストマイニングで精査し、これまでの用語と照合する。
- (9) 以上の過程を経て最終の実践分析モデル案を確定する。

4. 研究成果

結論としては、実用に供することが可能なレベルの多面的多角的実践分析モデル＝PDAが開発でき一定程度検証できたと考える。下記において、年度ごとの研究過程とその結果を示す。

(1)2009年度

①研究の第1年度の2009年度においては、すでに開発してきたソーシャルワークの7次元統合体モデルの確認と検討に基づきながら、実践分析モデル案(PDA)の多面的多角的な体系を探ることに重点をおいてきた。

②仮説としての7次元統合体モデルは、1. 価値と2. 視点・対象認識が相互一体的に連動し、整合性のある具体的な行為化が生じる。行為化においては、3. 機能・役割と4. 方法、5. 時間と6. 空間（場と設定）が出現・展開をはじめ。そしてこれら1.～6.の出現・展開には、7. 技能である内的スキルをはじめとして多様なスキルが出現・駆動する。ソーシャルワークの実践とは、ソーシャルワーカーによる7次元のまとまりある行為とする。後に、このような行為事象を「同時並列的事象」とした。

③こうした理論的概念によるPDAモデル案の枠組みは、モデル案の中核をなす実践内容群と、これに評価軸を加えたエバリュエーション（実践評価）群から成り立つとし、こ

れを検討した。

④実践内容群は、7次元統合モデルに基づき組み立てるものであるが、実践として何をなすべきか、何をやるか(したか)に関わるものであるだけに、分析項目の抽出が重要な課題となった。すなわち、実践内容群の下位体系を整序・構成に関する検討を行った。

特に、実践内容群の枠組みについては、量的研究も視野におきつつ大分類・中分類・小分類の体系となるように下位体系構成マトリックスを構想した。体系化には、2方向から掘り下げることにした。一つは、ソーシャルワーク実践に関する文献を基礎にした分析項目の抽出の試みである。他の一つは、7次元統合モデル研究において、抽出してきた「重要アイテム」と「意味づけカード」を活用して帰納法的に中分類・小分類の構成を試みることである。

⑤21年度の研究は、7次元統合体の実践分析の枠組みとして、これら2つの方向から組み立てる実践内容群モデル案を試案として策定し、実践事例への適用が可能かどうかを試みるまでの計画をしていたが事例への適用はならず、試案作成のみとなった。

(2) 2010年度

①第1年度は、すでに開発してきたソーシャルワークの7次元統合モデルに基づき、実践内容群と実践評価群系の項目を大分類、中分類、小分類とに精査しながら実践分析モデル案を検討し、その骨格を作り上げてきた。

第2年度では、これをさらに帰納法的に抽出し、重要キーワードを整序し、各次元別のフォルダを作成した。なお、これを「7次元統合体重要キーワードファイルボックス」とした。しかしながら、7次元統合モデル開発時の収集事例の実践内容系群に属する重要キーワード数が多く、小分類項目に属すべき重要キーワードファイルボックス作成完了には至らず、精査の作業がまだ終了していない状況があり、3年度目の研究に引き継ぐところとなる。

②他方、実践評価系項目群には、エバリュエーションの要素だけではなく、ソーシャルワーカーの実践的反省的思考(クリティカル・シンキング)を組み入れる重要性を再認識したので、検討をはじめた。この研究作業については、用語抽出という最後の配置が課題となっている。

以上のような課題を残してきたが、第2年度には、ソーシャルワーカーの実践事例に、まだ精査の途上ではあるが、PDAモデル(第一案的な仮モデル案)の実験的な適用を一部試みることで、PDAモデルに実践分析モデルの可能性を確認した。

(3) 2011年度

①第3年度の研究計画の主要な一つは、2つの系として構想しているPDAモデル案の策定である。すでに集積してきた実践諸事例(80余)の中から実践領域を考慮しながら約40事例を選定し、SPSSソフトテキストマイニングを活用して「7次元統合体重要キーワードファイルボックス」の再精査を行った。

但し、この精査はその後も続く。そこから7次元の整序された項目体系を構築し、これに整序された評価項目体系を加えて多面的多角的実践分析モデル=PDAモデル(案)を策定した。

②PDAモデル(案)は、7つの次元を7つの大項目とし、これに属する中項目、小項目からなる。小項目には付帯する語群を位置づけ、実践者が必要に応じて参照可能なような構成にしている(この部分については未整理となっているが、モデル案に特に影響を与えるわけではない)。なお、これまでの大分類、中分類、小分類は必ずしも分類に当たらないタームが含まれるため、大項目、中項目、小項目が適切と判断した。

③計画の第二は、PDAモデル案の試行(実験的適用)である。ここでは、PDAモデル案に関しては既収集事例への適用の試みと3名のソーシャルワーカーに自験例への適用の試みをしてもらった。実践対象が広く、ミクロからマクロ間の多様なシステムに関与する点に特徴が見られる独立開業型のソーシャルワーカー1名と2名のミクロ、メゾ系の実践レベルで活動することが多い医療ソーシャルワーカーの協力を得た。ソーシャルワーカーからは、モデル案が自己の実践分析に有用であるとの指摘が得られるとともに、項目の意味内容を理解することが難しい点があり適用のしづらさを指摘する意見が寄せられた。後者の解決については、各項目の意味内容を把握しやすい辞書を作成することで課題が克服できると判断する。

④計画の第三は、量的分析の設計及び新たなソーシャルワーク事例の収集準備、研究協力者の参加である。いずれも部分的に実施をしている。特に前者については、項目精査のためにテキストマイニングを活用することで質的な研究を量的に把握することが可能になり精査の助けとなった。

研究計画はおおむね達成できたが、PDAモデルは適用のしやすさの追求だけではない。多面的・多角的に実践がいかなるものか、把握できることが重要であり、この部分の検討はなお、継続するところとなった。

(4) 2012年度

①第4年度は、実践分析モデル案のソーシャルワーカーによる実験及び適用(6名、15実践事例)の2段階を経て最終モデルとして決

定した。その際、実験及び適用に関する詳細な検討シート（実践分析モデルシート含む）を作成した。なお、同シートは、今後の新たな量的研究に活用可能な構成にしている。

②適用結果からは、多様な実践領域—そこには異なるレベルの実践（ミクロ～マクロ）が存在する—の分析や自らの実践を全体的、客観的な把握を可能にするという意見が寄せられた。同時に申請者らの 2005—2007 年度収集事例の約 80 実践事例の本モデル適用においても同様な結果を得た。

③7 次元の実践分析モデルの最終的な構成は、2 系列、大項目、下位レベルを中項目、小項目とした。項目数は、1. 価値（第一系列中項目数 8：小項目数 34、第二系列評価項目数 8）で、以下の各次元では中、小、評価項目数の数字のみを挙げる。2. 視点・対象認識（3:12, 3）、3. 機能・役割（10：41, 3）4. 方法（7:29, 3）、5. 場と設定（3:9, 2）、6. 時間（3:17, 2）、7. 技能（9：26, 4）である。

④これらの整序には SPSS ソフトのテキストマイニングを活用してチェックし、検討するという過程を試みた。第二系列では、ソーシャルワークのソーシャルワーカーによる実践が 7 次元による「同時並列的事象」とする着想から、特に、クリティカル思考を反映する表現項目の導入を試みた。これに総合評価欄を設けた。本モデルは、ほとんどの実践領域及び実践レベルをカバーして多面的多角的「実践分析モデル」= PDA といえる構成と内容に達した。

⑤この間、ソーシャルワーク・マネジメント及びアドミニストレーションに関する実践分析用語を追加した。

⑥課題としては、小項目に付随する下位語群の整理・検討を残している。但し、この語群は実践分析に大きな影響を与えるものではない。アドミニストレーション系分析項目については事例数としては、少ないために文献なども活用して抽出したが、対象事例数を増やし再整序を図るとともに、第二系列のクリティカル思考を反映したより詳細な分析項目を強化することで PDA モデルの科学的妥当性は高まりうる。また、モデル学習教材の開発も汎用性を高めうる。

⑦本研究ではこうした課題は残ったが、約 100 事例の検討結果、実践分析モデルとしての実用可能なレベルのものが開発できた。

⑧ PDA モデル検証の一環として、本実践分析モデルの簡易説明版の作成などを通じ、ワークショップ的展開を通じて、多数のソーシャルワーカーの参加を得ることで、また、実践分析モデルシートを対象にした量的分析には、適用事例数を増やすことが必要である。本実践分析モデルの簡易説明版の作成などを通じ、あらたなワークショップ的展開を通じて、検証することで、本実践分析モデルの

科学的妥当性が高まると考える。

⑨なお、本研究の 7 次元統合モデルによる実践分析モデル開発は、これまでのソーシャルワークの方法優位の発想から、方法を一つの次元と位置づけることで、実践行為が何であるか、より具体的に明示できた。ソーシャルワークにあつては、これまで実践方法が優位性を保ち、他の要素が方法に収斂され、方法に隠れ、あるいは一要素的に扱われる問題を改めて認識することができた。それは、本研究において重要な転換を示すことができたといえ、貴重な成果となった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

- (1) 平塚良子(2011) 「ソーシャルワーカーの実践観—ソーシャルワークらしさの原世界」 ソーシャルワーク研究 36-4、60-67 （査読無し）

〔学会発表〕（計 1 件）

- (1) 平塚良子・黒木邦弘 ソーシャルワークの実践分析の枠組みに関する試論-7 次元統合体を基礎として
日本社会福祉学会 第 60 回秋季大会
2012. 10. 20 於：関西学院大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平塚 良子 (HIRATSUKA RYOKO)
大分大学・福祉社会科学研究所・教授
研究者番号：40257556

(2) 研究分担者

黒木 邦弘 (KUROKI KUNIHIRO)
熊本学園大学・社会福祉学部・准教授
研究者番号：60369832

(3) 端田 篤人 (HASHIDA ATSUHITO)

長野大学・社会福祉学部・講師
研究者番号：80387422

(4) 橋本美枝子 (HASHIMOTO MIEKO)

大分大学・教育福祉科学部・准教授
研究者番号：90315309

(5) 滝口 真 (TAKIGUCHI MAKOTO)

西九州大学・健康福祉学部・教授
研究者番号：20258635